

北海道暮らしの魅力を地域の活性化に ～移住者からの提言～



都市から地方へ——。田舎暮らしの魅力から、地方に移住を検討する人が増えてきています。近年は地方創生に加えて、新型コロナウイルス感染症拡大の経験から、密を避けられると、ますます地方移住への関心が高まっています。以前から、北海道では、雄大な自然や四季折々の魅力に魅せられた人たちが多く移住していますが、外からの客観的な視点を生かしながら、地域の活性化に寄与する活動をしている移住者は少なくありません。

小紙では、2019年7月号から、新たな取り組みをして輝いている北海道移住者を紹介するインタビュー「飛翔のレシピ」を連載しています。そこで、連載のインタビューア^{ていだん}ーと過去の取材対象者による新春鼎談を行いました。北海道に移住して、北海道暮らしを楽しむ二人とともに、北海道の魅力、移住者を迎えるための取り組み、これからの地域の活性化に向けた思いや課題など、感じていることを語っていただきました。

【参加者】

■新ひだか町総務部まちづくり推進課

移住コンシェルジュ

市川 福子 氏

(2022年7月号登場)

■(株) まちづくり観光デザインセンター代表

(一社) 北海道開発技術センター参事

かとう けいこ 氏

(「飛翔のレシピ」インタビュー)

■(一社) 豊富町観光協会事務局長

栗山 尚久 氏

(2022年11月号登場)

※本鼎談は2022年10月29日に開催いたしました。

北海道好きが転じて北海道暮らしを選択

かとう 今日は「飛翔のレシピ」でインタビューした皆さんの中から、10年ほど同じまちに住み続けている市川さんと栗山さんに来ていただきました。まずは自己紹介をお願いします。

市川 新ひだか町で移住を担当して10年目です。千葉出身で、大学も就職も東京でしたが、30歳を過ぎて新ひだか町に移住しました。子どものころから北海道に漠然とした憧れがあり、大学時代に初めて北海道に足を踏み入れました。雪まつり時期でしたが、転んだら声をかけてくれたり、迷っていても一緒に行きましょ

うと言ってくれたり、皆さん親切でどんどん印象がよくなり、「いつかは北海道に住みたい」と思いました。海外を経験した現在の夫が帰国後に新ひだか町に移住し、私も訪ねるうちに気に入ってしまい移住しました。その後、道内をくまなく旅し、十勝にも住んでみましたが、新ひだかで出会った人たちが忘れがたく、新ひだか町に戻り、今の仕事につきました。

栗山 豊富町観光協会で事務局長をしています。私も豊富町に住んでちょうど10年です。幼少期から関東暮らしでしたが、大学のワンダーフォーゲル部に入部し、18歳の夏に知床に出会い、将来は北海道か海外に住もうと決意しました。就職後、26歳で札幌の豊平区に転勤し、仙台や埼玉などでも暮らしました。その後、転職を経験し、45歳の時に自分は何がやりたかったのか原点に返って、大好きな北海道の観光に関わる仕事がしたいと思うようになりました。ちょうどハローワークで豊富町観光協会の職員募集を見つけて応募し、採用になりました。

かとう 二人とも大学時代に北海道に惚れたと聞いていましたが、具体的な市町村ではなく、「北海道」だったのが共通点ですね。

市川 北海道には得体のしれない引力があります。

栗山 以前から北海道は行ってみたい、住んでみたいランキングで上位です。田舎あり、都会ありで、北海道のブランド力はまだ捨てたものじゃありません。

市川 私は泣きたくなるくらい北海道が大好きで、「北海道に参加していきたい」と思っています。

栗山 何らかの形で北海道と関わっていたい気持ちはよくわかります。北海道がどうしたら元気でいられるか、衰退しているまちもあれば、元気なまちもありますが、それだけこれからの可能性を秘めていて、伸びしろがあります。

薄れていく北海道の「受け入れ力」に危機感

市川 ずっと北海道に住んでいる人は、北海道に誇りを持てず、価値をわかっていないようで、そのギャップがあります。その価値をわかってもらうためにはど



市川 福子氏

うしたらいいのか。それが移住コンシェルジュの入り口でした。移住者は北海道好きなので、移住者が増えれば、北海道の魅力を理解して自信につながっていくのではないかと。それなら、たくさん移住者を増やして、移住者の声を町民に届けようと、いろいろなことを始めるようになりました。

栗山 地域によって違いますが、北海道は「こんなところに来て、何も無い」という感覚の人が多いように思います。でも、私からすると宝の山です。人、景色、それらを含めた空気感、人との距離感など、私は大好きです。

市川 私が移住した当時は、生活館（地域の会館）で地元の人たちが手作りの葬儀をやっていて驚きました。葬儀の前夜に持ち寄る食材などを相談して、翌朝に集まって、婦人部はみんなで料理を作ります。時には言い争ったり、愚痴をこぼしながらも楽しくやっていて、その包容力に圧倒されました。私はよそのものに、亡くなった方の家族や親戚の一員になった気がしました。すべてが終わると、祭壇にある果物やお供物をみんなで分けるのですが、高価な果物は争奪戦です（笑）。葬式なのに、楽しくて平和で豊かで、私が亡くなった時もこんなふうに見送ってもらいたいと思いました。古き良き日本の共助の仕組みが残っていました。

今はどんどん衰退していますが、私が住んでいるエリアは誰一人取り残さないという思いで頑張っている地域で、北海道にはまだそんな宝物があることも伝えていきたいと思っています。

かとう 18歳の時、働いている母の代わりに葬儀の手



伝いに行ったことを思い出しました。親には教えてもらえないことを近所の皆さんのコミュニティの中から教えてもらい、とてもよい経験でした。リトル東京化した札幌ではもう残っていませんが、地方にはまだそんな風習が残っているところがあると思います。学生時代の北海道初訪問で、二人が感じた北海道のベースがそこにあるように思います。

栗山 北海道は、人や大地などいろいろな意味で「受け入れ力」という言葉がぴったりです。でも、地方ほど高齢化が進んで、その文化が薄れてきています。葬儀を手伝える人がいない、墓じまいするという話をよく聞くようになりました。

かとう 今でも自然や温泉、食べ物などの魅力はありますが、最も大切な人の魅力が薄れてきているかもしれない、そうであれば未来永劫、北海道が憧れを抱いてもらえる大地ではないという危機感を持ちました。

北海道の地域別のアピールが必要

かとう 市川さんが移住フェアに参加すると、どんな質問が寄せられますか。

市川 最近は移住ブームで、中古の空き屋探しの質問が多いです。でも、いきなり空き家を買って移住する方法は勧めていません。まず、自分に合う地域を探すように促しています。10年後のライフスタイルもイメージしながら一緒に考えていくようにしています。

北海道の田舎暮らしに馴染めるかという質問もあります。移住後は自分の努力も必要です。好奇心を持ち、自ら出かけて行って、地域の皆さんと積極的に関わるようにアドバイスしています。

栗山 テレビで取り上げられている素敵な田舎暮らしのイメージがあるのでしょうか。

市川 そこは現実的なところに軌道修正して、移住者の心がけも大切だということを伝えています。

かとう 東京や大阪の移住フェアを見にいくと、市川さんのような移住者がアドバイスしているまちは盛り上がっていることが遠目にもわかります。堅苦しい役場職員がいるよりも移住経験者の方がよい助言ができると思います。

市川 役場職員は、意外と自分のまちの魅力をわかっていないことがあります。

かとう 支援金や農業実習生の受け入れなど、制度については丁寧に教えてくれますが、そういう情報はインターネットでも探せます。どの季節に来るのがいいとか、お試し暮らしをした方がいいとか、そんな情報を移住者から聞いたほうが役に立つと思います。

市川 北海道は広いので、エリアによって気候や風土が違います。移住希望者には、まずどの地域が自分に合うのかを探してほしいと思います。

栗山 まずは北海道に来て、あちこち行ってみることが大切です。

市川 道外の人からすると、良くも悪くも広い北海道が一つになってしまっています。道内の移住コーディネーターの有志が始めたネットワーク「北海道移住のすゝめ」にも参加していますが、移住前に自分に合った地域を見つけるお手伝いをしたいという思いがあります。北海道はエリアごとに違った魅力があるので、もっと地域別に発信していくべきだと感じます。

かとう 同感です。新千歳空港で降りた方が近いまちもあるし、女満別空港に降りた方が便利なまちもある。でも、その距離間をわかっていない人が多い。

市川 振興局別に気候や風土の違いをPRして、北海道の中でも差別化するといいと思います。例えばフランスなら南仏やブルゴーニュなど、何となく各地のイメージが湧くように、北海道もおいしいワインが飲めるとか、パウダースノーが楽しめるとか、それぞれの地域の魅力がPRできると思います。

栗山 北海道に興味を持ってもらわなければ、何も進まないで、いろいろな入り口があっていいと思います。地域おこし協力隊もそうですが、地域と移住者のマッチングがうまくいっていない例が多いと感じます。それを解消しようと、移住を検討している人や地方事業の立ち上げを目指している人などが集うコミュニティスペースを運営して、地域の中でうまくマッチングさせる会社もあって、教育、IT、観光、地方創生といろいろなテーマの取り組みがあり、おもしろい取り組みだと思いました。

硬直した地域を動かすきっかけは、移住者

栗山 豊富町はアトピーで豊富温泉に湯治にくる人が多く、この10年ほどで100人くらいの移住者がいます。本州の皮膚科の先生の何人かが豊富温泉を推薦してくれています。湯治の間は症状が改善しても戻ると悪化するので、季節を決めて定期的に療養にくる人もいます。そうすると生活があるので仕事の問題が出てきます。

かとう 私も移住の相談を受けますが、仕事の質問は多いです。本州と同じくらいの年収で働けるだろうかと聞かれるのですが、それは能力とその地域にそういう企業があるのかということになります。

市川 若い移住希望者からは「仕事がありますか」と聞かれます。仕事は選ばなければあります。建設業者や福祉関係、特に医療・介護は本当に人手不足ですが、多くの人が希望する事務職は非常に少ないです。

よく伝えているのは、自分のキャリアを振り返って何ができるか、何が得意かを棚卸してみると、意外にそのキャリアが地方では役に立つことがあるということです。福祉の仕事でも、文章を書くことが得意であれば、その技術が重宝されたり、HP更新を担ったりなど、得意なことを生かせる現場があります。

栗山 受け入れ側の問題もあります。「忙しい」、「人がいない」、「誰でもいい」という発想になっていることが多く、どんな人を期待して求人しているのかをうまく伝えられていません。



栗山 尚久氏

かとう 日高のあるまちに移住したデザイナーの知人がいます。自分が暮らしているまちで起業したのですが、地元だけでは生活が厳しいということで、近隣のまちでも営業をしてみたらとアドバイスしたところ、今では振興局を超えて各地から仕事がかいています。デザイナーやITのような技術職は、地元だけで完結せず、近隣のまちの仕事も受注していけば、生活は成り立つはずです。

栗山 豊富町も一般事務の求人は少ないし、酪農も肉体労働なので制約があります。でも、それぞれの得意技を生かした働き方が広がっています。例えば、町内だけで教室をやっていたヨガインストラクターが、ほかのまちからも声がかかるようになっています。きれいな星空を見て浮かんだインスピレーションから、イヤリングを製作したり、フェルト人形を製作したりして、観光案内所で販売しています。いきなり収入が増えるわけではありませんが、生活の糧にはなります。

ちょっと仕事をしたい人、朝の数時間だけ酪農の現場を手伝ってほしい酪農家など、湯治客と地域のマッチングを工夫できないか模索しています。移住者のちょっとした得意なことが、地方では重宝されることが結構あって、そこをうまくつなぐことができないかと考えています。

市川 都会にいと埋もれてしまう得意技や趣味も地方では貴重です。最近移住した40代の男性は企業研修講師のコーディネートをしていたので、非常に調整能力が高く、重宝されています。

栗山 地方で調整力はとても重要です。

市川 都会ではあまり認識されていない調整力も地方



では潤滑油の役割を果たすので、ひっぱりだこです。

栗山 移住者はしがらみがないところからのスタートですからね。自分がオープンなスタンスでいるといういろいろな人との関わりから、さまざまな課題も見えてきて、いわゆる外からの見方というのが役に立っていると思います。

市川 恒常的に硬直している地域を動かしていくのは、移住者の調整力や無邪気さです。それが硬直を解いていくきっかけになります。移住者が多ければ多いほど、動きやすくなります。

かとう 市町村の計画づくりなどの委員会に参画する時は、必ず移住者や若い人を呼んでくださいとお願いしています。そのまちを選んで移住してきた人は、まちのいいところを知っていますし、若い人たちの前向きな提案は、地域を変える突破口になります。

公共交通問題も地域の工夫で

市川 地方の人手不足は深刻です。人材を有効に生かす仕組みを作れないか考えていましたが、いくつかの仕事をかけもちできるようなマッチングが必要だと感じています。

栗山 働き方が変わってきていて、1日中同じ会社で拘束されるという概念も薄れてきています。

かとう 仕事だけでなく、部活のサポートなど、得意を持ち寄ることが大切だと思います。

市川 お菓子作りやパン作りなど、ちょっとした得意技があれば、地方では役に立ちます。イベントで自分が作ったパンを売ることもできるので、夢を実現しやすい環境があります。

ハローワークの求人情報には載らない、2時間だけ子どもの面倒を見てほしいとか、そんな情報をマッチングできるアプリがあればいいと思います。そこに病院に行く人の車と一緒に乗せてもらえるようなマッチングもできれば、公共交通の問題もカバーできます。

かとう 婚活イベントで長くお付き合いしている中頓別町では「なかとんべつライドシェア」を導入しています。町民がボランティアドライバーを務めて、移動したい人はスマホのほか、役場に電話すれば安価で移動することができます。ほかにも病院の送迎などは、白老町の「NPO法人御用聞きわらび」や札幌市の「NPO法人札幌微助人倶楽部」などでやっていると思います。

地方で暮らしていくためには、足の確保が重要です。それぞれのまちで工夫して、公共交通の問題は解決の糸口を探してほしいと思います。

栗山 豊富町は稚内空港から60kmしか離れていないのに、公共交通機関で移動すると5～7時間もかかります。40年近く前の資料をひも解いても、空港と温泉が交通の便が悪いと書かれていますが、何も変わっていませんでした。観光協会で各運送事業者さんとも相談して、今は定額タクシーが走るようになりました。

また、豊富駅と温泉街は、観光協会が主体となり宿泊事業者さんとも協力して自家用有償旅客運送制度を利用して、送迎を行っています。仕組みをつくれば、何とか動いていきます。交通課題には制約が多かった運輸局の対応も、地域でできることは地域でという方向になっています。

高齢になって運転免許を返納してしまうと、地方ではどこにも行けなくなってしまいます。でも、まちを見渡すとスクールバスが走っていて、その横を社会福祉協議会のバスが走っているような状況があります。そういうものは横断的に町の未来を考えて取り組んでいくことが大切だと思います。

市川 バスルートが使えるのであれば、縦割りを緩和してスクールバスにおじいちゃんやおばあちゃんが乗るのもいいと思います。人手不足と公共交通は、本当

に深刻です。今年度から新千歳空港～浦河間のバスが廃止され、新ひだか町には空港から直行の交通手段がなくなりました。北海道は移動距離が長く、移動の問題は住民にとっても大問題です。

かとう 首都圏で生まれ育った二人の意見はとても重要です。北海道人は生まれたときから不便な鉄道と1時間1本のバスに慣れてしまっています。でも、移住者を呼び込むために、1日1本でもバスがあるかないかは大きな違いです。住んでいる人の声だけでは気付かないことがあります。

栗山 豊富町で取り組んでよかったのがレンタサイクルです。JRとバスの接続が悪かったので、レンタサイクルを導入しました。最初は駅前1カ所だけでしたが、利用者の行き先を調べて乗り捨てできる場所を3カ所に増やし、観光の点からも、2次交通としての役割としても定着してきました。電動アシスト自転車も導入し公共交通機関では行けないところにも行けるようになり、ガイドツアーもスタートさせました。

豊富町は全国で初めて自転車健康都市宣言をしたまちで、その精神を復活したいという思いもありました。

かとう 10年前に豊富町に関わる機会がありましたが、若い移住者が多くてびっくりしたことを覚えています。湯治なので年配者のイメージでしたが、20～30代の若い人たちが多く、日本の中でも治療を目的とした移住者が集まるという、ちょっと特異な存在です。

道民一人一人の心がけが移住者増につながる

かとう 若い世代の移住への関心はどうですか。

市川 若い人たちに対しては移住の事例が見える化して、情報を発信することがポイントです。20～30代の单身の方は、地方に行ってみたい、行くと何かあるだろうと可能性を感じているようです。とにかくいろいろな体験をしてみたいと言います。だから移住体験の中にインターンシップのようなお試しで働く場をセットで準備しようと考えています。

栗山 体験がパッケージ化されているとちょっとずつ



いろいろな体験ができて便利です。若い世代は、自分探しとともに移住先を探しているのかもしれない。

市川 先日、お手伝いをしながら知らない地域を旅する「おてつたび」というサイトの説明会に行ってきたが、草むしりのお手伝いの旅もすぐに予約が埋まるそうです。都市の若者が働きながら地域に滞在する「ふるさとワーキングホリデー」も人気だと聞きます。最終的に移住につながるかどうかはわかりませんが、若者の移住者を獲得するには、そこから始めていかなければいけないと思いました。

かとう 二人とも大学時代に北海道に来て、北海道を好きになったということでしたが、「おてつたび」や「ふるさとワーキングホリデー」も大学生の参加者が中心です。修学旅行で北海道に来た高校生が、道内の大学に入学したという話もよく聞きます。北海道とのファースト・タッチ・ポイントが高校や大学時代であれば、北海道を好きになって、将来の移住先になる可能性が高いと思います。

市川さんが初めての北海道で人の優しさを実感したことを教訓にすると、道民の務めとして、道外から来た人を温かく迎える心がけが必要だと感じます。道民にはそのDNAがあるはずです。移住者のために何かをするのではなく、外から来たと思われる人に声をかけたり、困っている人がいれば親切にしてあげる。それだけで、将来の移住につながるように思います。

若い世代も北海道ファンに

栗山 資金に余裕のある50～60代だけでなく、もっと若者にも北海道に来てもらいたいですね。



市川 感性が若いうちに素敵な北海道体験をしてほしい。北海道内の大学卒業者は就職で東京に出ても、北海道に帰ってくる人が多いと聞きます。

かとう 修学旅行マーケットでは、沖縄の平和教育と北海道の農村滞在が二大巨頭です。北海道にはアイヌ文化もあるので歴史教育もできます。コンブ干しや牧草ロールづくりなど、家族総出で仕事に向き合う様子は見ただけで感動します。北海道の一次産業の厳しさと天気とのつきあい方など、都会の子どもたちにぜひ見てもらいたい。

市川 それはいい体験になります。受け入れる農家や漁師も若い子が感動してくれるとうれしいはずです。ファームステイを受け入れると何でも感動してくれるので、やみつきになってしまう人も多いと聞きます。受け入れる側も活力がもらえます。

栗山 長期的に考えると、インバウンドだけでなく、いかに本州の人たちを連れてくるかという視点のほうが、将来の北海道につながるかもしれません。

市川 移住コンシェルジュとして、私はなるべくお金で人を呼ばないことを心がけています。支援制度や補助金についてよく相談がありますが、金の切れ目が縁の切れ目で、支援がなくなると帰ってしまうのでは残念です。もっとハートで掴まないとはいけません。それで掴むと一生ものです。地道な作業ですぐに結果は出ませんが、北海道を愛してくれる人を呼び込まないと、消費されて終わってしまいます。

栗山 お金はあげられないけど、夢は与えることができます。

かとう 私は道産子ですが、父方は徳島県から、母方

は岐阜県から来ていて、私は四代目になるのですが、もう一度開拓にきてもらう感覚ですね。

首都圏などの都会には楽しいこともあります。息苦しさや危険を感じることがあります。でも、北海道には開拓使と本州から夢や志を持ってきた人がいて、そういう人が築いてきた島です。日本全体の閉塞感がある今だからこそ、北海道に移住する魅力があると思います。

栗山 開拓者はみんな移住者で、移住者が北海道の歴史を刻んできました。そこには、いろいろな都府県の歴史や文化が入り交ざっています。

かとう 北海道の人たちはハイブリッドでユニークです。互いの違いを認めて、苦しい開拓の状況の中で生き延びてきたからこそ、優しさがあるのでしょうか。

市川 氏素性がわからなくても「寒いから火にあたっていきなさい」と優しい言葉をかけてくれます。

栗山 いろいろな人が集まっているから、いい意味でしがらみのない文化が育っています。「もう一度、開拓を」という精神で将来の絵も描けそうです。

かとう 今日はありがとうございました。

市川 福子 (いちかわ ふくこ)

1968年千葉県千葉市生まれ。早稲田大学在学中に演劇研究会に所属し、役者として活動。卒業後、東京のイベント会社に勤務しながら、演劇やナレーションの活動を続ける。2005年に新ひだか町に移住。その後、十勝の農業生産法人での勤務などを経て、2013年から新ひだか町役場で移住を担当。移住コンシェルジュとして自らの経験を生かした相談業務に当たる。北海道とその暮らしの魅力を伝えるため、地域の仲間たちとポッドキャスト番組も配信している。

かとう けいこ

1963年北海道足寄町生まれ。北海道大学大学院農学研究院共生基盤学専攻(博士後期課程)単位取得退学。道新スポーツ「花新聞はっかいどう」編集長、(一社)シーニックバイウエイ支援センター事務局長を経て、2011年に㈱まちづくり観光デザインセンターを立ち上げる。小紙2019年7月号から、北海道に移住して、新たな取り組みを实践し、輝く人を紹介しているインタビュー「飛翔のレシピ」を担当。道内外の地域活性化や観光のコンサルティングにも関わっている。

栗山 尚久 (くりやま なおひさ)

1966年愛知県半田市生まれ。専修大学卒業後、㈱朝日トラベルエージェンシー入社。カウンター業務、営業、添乗員のほか、合併等により、クレジットカード業務などを担当。㈱日本旅行オーエムシートラベル、㈱ツクイを経て、2013年に豊富町観光協会事務局長に転職。豊富町への移住前は、転勤で千葉県、北海道、埼玉県、宮城県、石川県などで暮らし、全国45都道府県訪問の経験がある。